九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

志賀直哉の「和解」と尾道の風景 : 風景現象学として

荒木, 正見
福岡女学院大学 : 助教授

https://hdl.handle.net/2324/1788898

出版情報：福岡女学院大学紀要. 3, pp.55-78, 1993-02. 福岡女学院大学
バージョン：
権利関係：

志賀直哉の「和解」と尾道の風景

――風景の現象学として――

荒　木　正　見

序

志賀直哉は長編小説『暗夜行路』をはじめとする多くの作品で自らの父親との確執と和解の経緯を下敷きにしてテーマを構成する。父子確執の具体的原因については，新潮文庫版『和解』（新潮社・昭和24年／平成元年）の安岡章太郎解説（110-117頁）によれば（昭和43年），志賀直哉が19歳の年（明治35年・1902），足尾銅山鉱毒事件で，被害者の農民視察旅行に出掛けようとして父親に反対されたことに端を発するとされ，さらに志賀家の女中千代との恋愛に対する父の反対などを経て，父子の対立は決定的になったとされている。

そして，現実のその「和解」は，大正６年（1917）のことである。同じく安岡章太郎解説によれば，和解の経緯は小説『和解』に詳しいとされ，また，父親の方にもそれなりの心境の変化があったと推測しながらも，さらに，「志賀氏の気持の“変化”が父君との和解を生んだ」（115頁）と述べられている。

たしかに，後に小説『和解』を詳細に分析しても，また，志賀直哉の伝記を辿ってみても，さまざまな出来事が複合的に作用し，志賀直哉自身が成長し和解に至ったとみるべきであろう。とすれば，その「和解」は実はそれ以前から始まっていたと言えるのではないか。成長，もしくは人格的発達を考慮すれば，とりわけはじめての本格的自立を企図した大正元年から翌年にかけて（1912－３）の尾道行は，対立を『時任謙作』として書こうと意図して訪れながら結局は失敗したというその点においてこそ，まさに父親との「和解」の準備としての一端を担うのでないか。

このような問題意識のもとに小論は志賀直哉の「和解」と尾道との関係について考察するが，小論では他の多くの研究と異なり，主に尾道の側面から考察するという視点を持つ。従って，大正元年当時の尾道の状態，もしくは，歴史の総てを背負った尾道そのものの考察を中軸に置く。そして，志賀直哉の心理的推移については，小説『和解』（大正6年・1917）の分析を主とする。使用テキストは，岩波書店版全集（岩波書店『志賀直哉全集　第二巻』，1973／1983，321-419頁）を中心として，上記新潮文庫版，角川文庫版（『和解』，昭和29年／平成2年）を参考にする。なお，全集からの引用は，漢字のみ現代表記に直した。

また，分析および考察の方法は，広義の現象学に基づくものとする。すなわち総ての対象（事柄）は，例えそれが仮に物質的対象であってもそのまま客観的実在と決めてかかるのではなく，対象の客観的超越性としての判断を中止し，本質直観を開始するところを考察の端緒とする。この方法は，具体的には総てを筆者自身の主観的表象の地平に捉えたうえで表象総ての相関的関係を求めつつ，対象の客観的本質へと迫っていくものである。それは，主観的印象を含む総てのデータをそのコンテキストとする。その意味で，芸術表現，もちろん文学的表現に関わる，鑑賞的要素をも取り入れて分析し考察することには，とりわけ有効である。さらに，単に主観的印象を用いるというのではなく，そこから客観的本質に迫る。後述するように，「事柄」を最も厳密に現象としてのその発生から考察すれば，それは完全な意味での全体，すなわち，意識，無意識の全体によって構成されたものであるから，構造的には必然的に客観的性格を持つと言えるからである。もちろん客観性を実現する為には，認識論的課題，つまり，先に述べたような，研究者自身の論理的努力が必要なことは言うまでもないし，小論もその一環として位置づけられる。

1．「和解」の本質的意味

まず，小説『和解』を分析し，志賀直哉の内面における「和解」の本質的意味を探求する。和解の経緯は，志賀直哉自身の章だてに沿って正確に辿ること

ができるので小説を参照しつつ考察を進めるが，この和解の経緯においては，先に述べたように，和解に至る直接的理由は，現実を含めて表面上ははっきりしない。他方，実際に和解は起こったのであるから和解の原因が存在する。そして，尾道の側から言えば，その原因の一つに尾道という存在を考えることは出来ないだろうか。小論の最終的な目的はこの点にある。

まず，和解の経緯において最も衝撃的な事件は，「実子慧子（さと）の死」である。叙述の詳細さにおいても，叙述量においても，それは，テーマの中心である最後の「和解」の部分と双璧を為して際立っている。では，この「死」はいかなる意味を持つものであったのか。

叙述を詳細に辿れば，死にゆく赤児の経緯は即物的に詳しく，感情を抑えながらも描かずにはいられないという直接的意識が働いているのに対して，その前後の，麻布の父とその一家との関係の叙述においては，自らの意識を反省的に捉える主人公の微妙な心境の変化があることに気付く。まず，「此赤児が父と自分との和解の縁になるやうと皆（みんな）が願ってゐる事がわかってゐた。皆には此赤児を其為（た）め出来るだけよく利用しようと云ふ気が暗々の裡にある事がわかってゐた。然し此赤児を通してと云ふ気は自分にはなかった。」（全集第二巻341頁）と述べられるように，赤児の死に至る原因を，自分と父との不和の和解の為に，周囲が赤児を利用した所為だとする。具体的には，安孫子を訪問した祖母が父に赤児を見せようと無理に東京との間を往復させたことにあるとする。その祖母の訪問の前には，主人公の方が赤児を伴って父に見せるために上京せよとの依頼を断っているのであるが，それは，赤児と祖母との健康を父が天秤に懸けたという「邪推」によるものであったともされる。かくして，赤児の死に至る前までの叙述は，父方の態度を厳しく批判する立場を採る。そして，その批判的態度は，一連の葬儀における父の態度に向けることを中軸とし，妹の出産まで継続する。

この批判的態度に緩解の兆しが見られるのは，旅による気分転換もあるが，なにより妹の出産と，そして，次の実子留女子の誕生である。第九章の末尾に「今の自分が自分だけで調和的な気分になりかけてゐるのにという気のする点

で，段々年寄って行く父の不幸な其気分に心から同情を持つ事もあった。」（全集第二巻378頁）と述べられる心境は，留女（るめ）子の誕生によって得られた。しかし，単に娘が生まれたから，というのは理由の片面でしかない。実は娘の名前は祖母に付けて貰い，それも祖母の名をそのまま「子」を付けただけで譲り受けているのである。また伝記的事実においても，尾道時代の最後に当たる大正２年（1913）１月に洛陽堂から出版した第一短編集の題は『留女』という祖母の名そのままなのである。しかもその短編集には冒頭に『祖母の為に』という作品をあげただけで，「留女」という作品など存在しない。小説『和解』において，長女の死の原因のひとつとも目される祖母の行為について厳しい態度は確かに存在するが，その児の死について肩を震わせる祖母の姿にすぐ怨みは消え，むしろ，すぐに積極的な同情へと変化していくのである。まして，後に祖母が病に倒れれば，ひたすらその安否を気遣うことにもなる。つまり，志賀直哉の心の底には祖母に対する気配りが常に流れていて，その祖母と，長女の死や次女の誕生が常に関連しながら志賀直哉自身の調和の獲得へと向かっていく。

このように，この小説に示される和解の経緯とその理由については，古典的ともいうべき内容を示唆する。結論を先に述べればそれは，日本の伝統的家族制度における，母性的なものを媒介とした父子の統合である。

ここで，現象学としての思考の方法を確認しておく。まず，表現された事柄は志賀直哉自身の個人的意思の表現であると同時に，読者の主観的受容性に基づくものである。その意味で，テキストは既に現象である。しかし，現象は単なる仮象ではない。認識論的には，現象が成立するに至った，識閾下の構成（Konstruktion）が存在する。そして，この構成が普遍的に他者と共有されうるという時に，その現象の指し示すものは，客観的存在と呼んでよい。すなわちフッサールが『危機書』第28節において「私，つまりそれぞれの個別的私にとって妥当するだけではなく，ともに生きている我々もまたともに在る世界を，前もって与えられ，所属しているという意味においてある世界として持っている。」（E. Husserl “Die Krisis der Europäischen Wissenschaften

und die transzendentale Phänomenologie", Husserliana 6, Martinus Nijhoff, 1976, S. 111)と述べられる世界を客観的世界として捉える通りである。また，存在論的にはこの構成は，単に識閾下の構成に留まらず，意識，無意識の全体における真の客観的な意味での構成である。かくして，問題は構成の因果性を考察することへと移行することになるが，本来識閾下の出来事だけに，原則的には妥当するのであればそれをどのように語ってもよいとはいえる。しかし，学問的正確さを期す為に，ここでひとつの目安を導入することを確認する。それは，より普遍的な本質が発生的に現象しているとみなす視点である。フッサールが現象学の方法の一面として「本質直観（Wesensanscauung)」を挙げているように，現象はその隠れた本質を指し示し，本質は意識表象に必然的に付帯する主観性を脱却した普遍性を有するべきものである。かくして主観的表象の特殊な個別性を有する意識現象と，普遍的本質との間には，特殊から普遍へという系列的解釈が可能になる。事柄成立として具体的な諸条件が挙げられていくものを，このように系列的に整理しつつ考察することで，説明に正確さを求めることができるといえよう。

さらに以下では論理的普遍性を求めるために小説『和解』の分析と志賀直哉の実際の人生やそれらについて論じた諸考察とを重ねてみる。はじめに和解を企図しなければならなかった父親との対立について考察する。まず，最も普遍的に考えれば，現実的な諸契機はさまざまあるにせよ，対立の根底そのものは何も新しいものではなく，むしろ人間であれば誰でもその成長過程において経験するような普遍的意味合いを持つものであるといえる。

例えば，人格発達理論の古典とされるエリクソンによれば，学齢期を終えて次の青年期（Adolescence）になれば，同一性に関する危機が生まれ，心理的に重要な対人関係，すなわち時として，対立関係という危機をも招きかねない人間関係の中には，リーダーシップのモデルとなる人物が含まれるとされる（E. H. Erikson "Identity and the Life Cycle", Norton, 1959 / 1980, P. 129)。普遍的な意味だけで言えば，他の誰でもよかったのであるが，志賀直哉の場合，それは父親にほかならなかった。そして，ここにこそ志賀直哉とそ

の父親とのより特殊な事情が存在する。

志賀直哉が父親をどのように捉えていたのかに関しては，西垣勤「志賀直哉論　―その思想と感性をめぐって」(『一冊の講座　志賀直哉　日本の近代文学3』，有精堂出版，昭和57年）では明瞭に，「(志賀直哉自身の＝筆者註）家父長的自我がすっかりと根を張り，父の家父長的自我と対峙しているのであり」と述べられ，それに続く「和解」は，父が次の家父長に「家」を譲るべき「見事な儀式である」とされている（11-12頁)。また，池内輝雄「志賀直哉・父子対立の問題」(同『一冊の講座　志賀直哉　日本の近代文学3』）でも，その対立は同様な性格を持つものであることが述べられたうえで，その根源的な原因が，父と祖父との家父長としての資質の違いにあることが論証されている（15-24頁)。たしかに，小説『和解』における父の姿をみれば，先の章立てに沿って整理した個所の「不愉快」と記されることごとくはひたすらに理不尽で，時としてその人格的統合性さえ疑わせる存在として描かれている。

ところで，これらの対立についての考察は先の普遍的な，人格発達につきものの父子対立にほぼ近いところでの考察であるとともに，より特殊な意味合いを兼ねた複合性を持つことに気付く。それは「家」の問題である。池内論文ではその事情を父の成育史やそれ以前の志賀家の状況から詳細に確認している。

では，小説『和解』においてそれはどのように表われているのであろうか。

とりあえず作品全体から言えることは，いたるところに家族・親族が表われ，相互に関係し合い，「和解」というテーマに向かってそれぞれの立場から徐々に足並みを揃えて進展しているという構造の存在である。テーマに向かって統合されていくのはすべての文学作品に共通のことであるが，この作品の場合その担い手は家族・親族なのである。なお「和解」に関わるひとびとの関連については，山田有策「「和解」の構造」(『一冊の講座　志賀直哉　日本の近代文学3』，有精堂出版，昭和57年，75頁以下）に構造的に述べられているので，ここでの詳述は避ける。

さて，小説『和解』のなかでとりわけ父に関しては，一面においてはことさらに家父長として振る舞っているように描かれていることも確かである。様々

な場面で，家族が父を遇する仕方は日本の伝統的な家父長に対する尊敬と，家父長の威厳とを感じさせるものである。例えば，第三章のいさかいに於いて，「此家（うち）に出入（ではひ）りする事はよして貰はう」（全集第二巻338頁）と，直接に権力を行使する。他の家族は父の意見によって行動し，平常は父の意向を間接的に伝え合って家族全体の調和を保とうとするのである。そこには西欧的な近代によってもたらされた「自我」は見られないように思われる。

またそれ以上に，志賀直哉にとっての典型的な家族制度を感じさせるものとして，第一章の墓参がある。この光景は小説の冒頭だけに，様々なモチーフを内包するものである。「墓参」とはたしかに最も普遍的層におけるテーマとしては，心理分析者が「死と再生」のテーマとして指摘するように，ひとつのことの終了を意味し，新たな心理的状況に向かっての旅立ちを示唆する。これが，「和解」というテーマそのものに繋がることはいうまでもない。しかし，その墓参の心理的対象は，当日の目的としての一周忌としての死児だけではなく，祖先すべてにわたる。とりわけ，はじめに祖父と実母の墓参をするのは象徴的である。しかも，墓を，そこに客観的に存在するだけの即自的なものとして見るのではなく，自らに語りかけ，自らもまた問いかけるものとして即かつ対自的に，自らと相互に融け合ったものとして捉えているのである。この場合祖父は大家族の象徴であることはいうまでもない。そして，母親は今後の考察の鍵となる志賀直哉自身のテーマである。この墓参の姿に見られるように，志賀直哉自身は，基底的にはこの伝統的家族制度を否定しているのではなく，むしろ身を委ねたく思っているといって良い。

しかし，より特殊な層，すなわち，現実の状況に極めて近いところで，志賀直哉は，大家族的統合に背き，やがて和解する。その背く対象が父にある。また，それぞれの家族の長として振る舞う父子それぞれの態度が，他方ではびくびくした不安定さを持つことも見逃せない。そして，その一端には父の特殊事情が存在する。志賀直哉とその父は疎遠であった。それは，物理的にも疎遠であった。その事情の概略は，次の通りである。なお，この詳細については，前記の池内輝雄「志賀直哉・父子対立の問題」に特に父に着目して述べられてい

る。志賀直哉は，明治16年（1883），石巻に生まれた。当時，父は第一銀行石巻支店員であったが，明治18年（1885），辞職し，一家を伴って上京し，相馬家旧藩邸に住んでいた祖父直道の元に同居する。その時点で，直哉の養育は，祖父母に任せられる。それは，夭折した兄のようになってはいけないという祖父の意向であったが，物理的には父親が文部省の役人として金沢や釜山などに行っていたりなど家にいなかったという事情も大きい。このことは，父親の側からも悲劇である。伝統的家族制度が旧態依然として存在する時代に，強い家父長として君臨する祖父に我が児の教育を一任しなければならない状況は，今日想像する以上に大家族の秩序から浮き上がったものであったといえる。やがて明治39年（1906）正月（直哉23歳）に祖父が亡くなるが，父子の疎遠な関係は一層悪化し，やがて決裂，明治45年（1912）直哉の尾道行きと，続いていくのである。それにしても，父親の側における逃れられない事情は，まさに，日本の近代に特徴的な，土着的なものから切り離された労働者もしくは勤労者としての職，つまり役人や会社員であり，しかもそれなりの地位ゆえに各地を点々としなければならなかったという点にある。もちろんそのような個々の実力が問われる社会においては，近代の個人主義を特徴付ける意識的な自我の発達が要求される。これは，旧藩という狭い単位に所属し，心身の狭い行動範囲の中で，自分の立場を確固として守っていることのできる祖父とは，まさに対照的であるといわなければならない。とりわけこの父親にとって不幸だったのは，明治維新という時代の変化に基づく社会構造の変化に就職時に初めて遭遇しなければならない世代であったという点である。先が見えないという点では，常に脅えて過ごさなければならないという不安感をぬぐい去ることはできないし，家に常時居ることができないという点では，家族的同一性さえ失わざるを得ない。しかも，まだ大家族的家族制度は厳然として存在するのである。これに対して志賀直哉は，祖父に養育されたとはいえ，片方では近代的な個人の生き方を重視する考え方を受容する環境と時代にあった。その典型が，18歳の時，内村鑑三を知り，その影響によって読書の楽しみを知り，文学に志したという事実である。この正義心が，小論冒頭の足尾鉱山事件をめぐる父親との対決へ

と繋がっていくことは言うまでもない。この時点での直哉にとって，近代とは，自覚的意識の信じるままに，すなわち，自我の命ずるままに果敢に生きていくという姿勢にほかならない。

このように志賀父子の対立は，歴史的特殊性を考慮すればまた近代の萌芽期において特徴的な対立，すなわち各々の内面における日本的伝統と西欧的近代との矛盾に苦しみ，それゆえに自らの未発達な自我を主張し合わなければならなかった対立でもあった。

このような重層的な対立を背景に「和解」が進行する。そして，この対立と「和解」の経緯を重ねた時に，志賀直哉の重層的な心理が見えてくる。先にも述べた通り，「和解」は，父との和解でありながら，その媒介は子供の死と誕生であり，祖母に対する思惑の変質であった。そして，そのような媒介の存在によって，「和解」の本質的構造が規定される。それはまず第一に，伝統的家族制度が持っている，父性的なものと，母性的なものとのホメオスタシス（恒常性）を目指す統合である。その意味では，この「和解」は古典的な性格を持つものであると言えよう。

しかし，先の対立を巡る考察から，「和解」の第二の側面が指摘される。それは自我と自我の意識的衝突とそれを弁証法的に止揚する統合である。「自我」すなわちエゴは，構造的に無意識的情動を否定する宿命を負う。それは意識の自覚的側面に限定された仕方であり，自分ではよかれと思っていても，識閾下を含む全体構造にとってはほんの一部でしかなく，時として自分の本来の中心（ユングが「自己（Selbst)」と呼ぶ）とは，ずれていくこともありうる。否むしろずれているからこそ，例えばヘーゲルが「意識の不幸（Unglück des Bewußtsein)」と呼んだ事態へと至るのである。しかしまた，ヘーゲルにおいて，新たな曖昧な表象の立ち表われに対して意識が新たに解釈へと乗り出していくように，健全な魂は自らの内なる声を聞きその声と調和しようとする。個人において起こるこのような統合の図式は，原則的には複数の人格同士においても同様である。しかし，そこではぎくしゃくとしたドラマを要求する。

小説『和解』においても，それは明瞭に示されよう。態度としては，自己の

全体的状況，すなわち周囲や真の理性を無視した，えこじな態度になるであろうし，それゆえ必ず自分自身への不信感に陥ることになる。第三章の次の個所はその典型である。「所が実際は私怨を含んでゐる自分が自分の中にあったのである。然し，それが全体ではなかった。他方に心から父に同情してゐる自分が一緒に住んでいた。」（全集第二巻334頁）この自己矛盾こそが自我意識の特徴である。また，父の方も，第四章において，出産費用をすべて出すという形で，本来の父子関係を希求しているにも拘わらず，口頭では，息子を頑なに拒否する。父子のぎくしゃくとした関係はすべてこのような双方それぞれの自己矛盾に形作られているといってもよい。この自己矛盾は志賀直哉自身にとって説明できるものではない。ただ何とも言えない「不愉快」となって自覚される。麻布に対して，また，妻に対してしばしば抱くこの「不愉快」こそが強い自我意識の証拠である。そして，このような意識的な性格の対立や分裂は，やはり意識的な統合を必要とする。十三章から十五章に至る「和解」の儀式は，くどいまでに仰々しく大袈裟である。まさに自我意識の統合にはそれだけの装置が必要であった。

しかし，はじめに考察したようにこの「和解」は単に意識的な自我の統合のみではない。第十三章の「和解」のクライマックスで当人のみならず周囲までもが泣き出すという情動的統合がそれを示す。泣くという感情的表現をもって場を構成するのは，意識的自我の持つ仮面性を脱ぎ捨てたのだといえよう。それは，これまで考察してきた普遍から特殊に至るすべての層の真の統合を意味する。

このように考えてくれば，初めの疑問，すなわち和解の媒介としての母性的要因の意義がはっきりしてくる。志賀父子の双方にとって本来的統合とは，伝統的に連綿と続いてきた大家族制の持つ全体的ホメオスタシスであった。そこでは，祖父がそのようにしてきたような家父長が確かに存在しはするが，その家父長はあくまで家族の全体，とりわけ子孫を絶やさないという物理的事情からも女性的なものと相互に連関し合った全体的なものの象徴としての性格を有する。ところが，父子ともに，西欧的近代に特徴的なそれぞれの自我を強固に

持って対立した。本来の統合に至るためには，その本来の支えに頼るしかない。この場合それは，表面的には祖母によって象徴されている。また，子供の死と出産という「再生」を遂行する場面の表現密度を考えれば，具体的な祖母にのみ限定するのではなく，大家族を連綿と繋いでいく女性原理そのものに統合の契機を求めたといえよう。そして，もちろん冒頭の生母の墓に参るというシーンに象徴されるように，作者志賀直哉は一個人として，今は亡き生母にコンプレックスにも似た感情は抱いている。それは厳しい躾をした祖母には得られない原初的母性への憧憬である。女性原理に統合を求めるという姿勢の個人的契機がここにも存在する。女性的原理を表現するというのは，これら総てを内包したうえではじめて成立するものである。

そして最後に，作者としては総まとめとして，やや意識的形式的にテーマを示唆する。それは「時節因縁」と引用された叔父からの手紙であり，さらにその中に引用されている漢詩である。

「東西南北帰去来　夜深同見千岩雪」（全集第二巻419頁）

帰りたいのは母なる故郷であり，「同じく見る」という家族的統合である。

かくして，『和解』における対立と統合の流れとその意味を考察することで，小説『和解』という「現象」に投影された志賀直哉自身の心理的傾向性を推測することができた。

ではその心理的傾向性が，対立の究極的形態としての初めての自立を目論んだ尾道とどのように共鳴しあうのであろうか。それが次章の問題である。

2．尾道・1912年の風景と志賀直哉

父親との確執をテーマとした小説『時任謙作』は，『続創作余談』（昭和13年）によると，「大正元年の秋，尾の道にゐた頃から書き出し，3年の夏までかかって，どうしても物にならなかった。」（全集第八巻16頁）と記されている。それは，同じ『続創作余談』に，「私情を超越することの困難が，若しかしたら，書けなかった原因であったかも知れない。」（全集第八巻17頁）と述べられ，さらに『和解』の経緯のようにやがて父と和解してしまい，また，『或る男，其

姉の死』（大正９年）で，「比較的公平に批判出来る形で」（全集第八巻18頁）書くと，もうそのテーマで書く気が無くなってきたと述べられるように，結局完成されなかった。

ところで先に分析した対立と和解の本質からみれば，少なくとも自立を企図して家を出て，その自立そのものをテーマとした作品を完成させる為には，少なくとも先に述べてきた和解の本質と重なる環境に身を置く訳にはいかない。しかし，もし尾道に辿り着いたことが，対立をテーマとした作品を完成することの障害になったというのなら，大正元年（1912）の尾道に，先に述べてきた対立と和解の本質と共通する性格や雰囲気が存在しなければならないと言えよう。もちろん，それは，人格発達をうながし，無用の対立を解消させるという，積極的な意味合いにおいてのことであるが。

この考察の手掛かりとしてひとつの象徴的切り口としてとりあげるのは「尾道の風景」，それも，1912年における風景である。とはいえ，はじめに風景の意味の最も深層として，地形を考察しようとすれば，それは，少なくとも今日の東土堂町八の志賀直哉旧居から見える風景に限り，当時とはさほど異なったものではない。その地形に重なって今日の建造物と暮らしがある。その風景は何を語りかけてくるのか。

『暗夜行路』前編・第二・三には次の様に述べられている。「景色はいい処だった。寝ころんでゐて色々な物が見えた。前の島に造船所がある。其処で朝からカーンカーンと鉄槌（かなづち）を響かせて居る。同じ島の左手の山の中腹に石切り場があって，松林の中で石切人足が絶えず唄を歌ひながら石を切り出してゐる。（後略）」（全集第五巻165頁，1973／1983）今日もその寓居から初めに目に飛び込んでくるのは，狭い尾道水道を挟んだ対岸の向島（むかい）である。そしてまずその海岸部の造船所に視線の焦点を合わせてから，次第に町並みの背後の山へと視線は移動する。この視線の流れは，現実に記述通りに移動する。しかも，山は思いのほか，高くて大きい，手前に狭い海峡があり，その海岸部のすぐ背後に標高166m以上の台地状の山が尖鋭的な峰とともに聳えている風景は，美しく圧巻でさえある。そして，同時にそこには産業の息吹きがある。

次に，作者の視線は，尾道水道の手前，眼下の尾道の町へと移行する。「下の方の商家の屋根の物干しで，沈みかけた太陽の方を向いて子供が棍棒を振って居るのが小さく見える。其上を白い鳩が五六羽忙しそうに飛び廻っている。そして陽を受けた羽根が桃色にキラキラと光る。」（全集第五巻165頁）対岸から手前に移行した視線は，距離の近さと程良い標高から，尾道の中心部，商家や住宅の集まっている場所を手近に見下ろすことになる。そこには，リアルな日常の生活がある。

ところで志賀直哉が最も親しんだこの風景とともに，『暗夜行路』に記されている尾道の風景はもうひとつある。それは，前編・第二・二の尾道に着いた折の記述である。とりわけ千光寺山から風景を俯瞰する以下の記述は，先の引用と構造的な類似性を持つことで注目すべきものである。「前の島を越して遠く薄雪を頂いた四国の山々が見られた。それから瀬戸海の未だ名を知らぬ大小の島々，さういふ広い景色が，彼には如何にも物珍しく愉快だった。烟突に広く大阪商船の印をつけた汽船が，前の島の静かな岸を背景にして，時々湯気を吐き一寸間を措いて，ぼーっといやに底力のある汽笛を響かしながら，静かに入って来た。」（全集第五巻160-161頁）

風景の全体を大きく記述する個所は他には次の個所があるがこの個所でもまた「其頃から，昼間は向ひ島の山と山との間に一寸頭をみせてゐる百貫島の灯台が光りだす。それはピカリと光って又消える。造船所の銅を熔かしたやうな火が水に映り出す。」（全集第五巻165頁）と対岸に向けた視線が「十時になると多度津通ひの連絡船が汽笛をならしながら帰って来る。舳の赤と緑の灯り，甲板の黄色く見える電灯，それらを美しい縄でも振るやうに水に映しながら進んで来る。もう市からは何の騒がしい音も聴えなくなって，船頭達のする高話の声が手に取るやうに彼の処まで聞えて来る」（全集第五巻166頁）と船とともに海峡を渡り，手前の市街へと向かうのである。これらの風景描写に共通する視線の流れは志賀直哉における独特の心象であると共に，現実の尾道においても，この風景が尾道の象徴的風景として，意識の深層を形作る普遍的意味を持つとも考えられる。

そこでこの普遍的意味を読み解く初めの手掛かりとして単なる個人的な印象ではなく，広義の現象学的思考ともいえる夢分析や箱庭療法，絵画療法などで用いられる映像分析の仕方で，視線の流れに沿って分析してみる。

まずいずれも初めに注目するのは，風景のなかほど対岸に横たわる向島である。作者はその中の生活部分にまず目を向け，やがて視線は背後の山へと上っていく。後者の引用に見られるように，目の標高が高くなれば対岸の海岸部における生活は見えないが，初めに視線を投げた個所は，同様に対岸の島であることを示唆し，そこから徐々に上の山へと，さらには，もっと高い四国の山へと視線は移行していくのである。対岸の，それも島の表現は，新たな可能性の模索を意味することが多い。そして，まず生活や生産を気にするのは，新しい生活の模索である可能性を示す。さらにその背後の山へと視線が移行するのは，模索に父親的要因，または自覚している意識的要因が関係することを意味している可能性がある。はじめにここに視線が向かうのは，そのことがかなり大切な問題である可能性が強い。しかも，現実の風景を見れば明らかなように，尾道からの風景は例え千光寺山に登っても，水平線で空と接するのではなく，むしろ鋭い稜線を描く山々で背景の空と区切られるのである。これは，海に直面した港湾都市としては異例のことである。そして，この山々が風景に父親的な，もしくは，交流分析（ＴＡ）の用語を借りれば，父親らしい批判的要因を持つ，全体の法則をわきまえた上での厳しさとめりはりのある落着きを与えるのである。さて，作者の視線はここから急に手前の海へと後戻る。意識的目標や目的意識の表れやすい上方に比べて，下方への視線の流れは無意識的な潜在性や，習慣となってしまっている現実性への流れであることが多い。この場合，そこには母親的要因を持つ海がある。それは，受容的な安らぎでもあり，エネルギーの源でもある。そして，最も現実的意識的な生活が行われている尾道の市街地は，視野の真下にある。それは，映像的にも極めて現実的なところであり，屋根の描写に見られるように細かく親しいものであるが，普段は，余りにも視野に近すぎて時として見失うことも有りうるものである。このような尾道の映像を総合的に見れば，そのおおまかな心理的構造は志賀直哉に限らず，誰にとっ

ても心地好い。現実を忘れようとして訪れた旅人にとっては父親的要因の意識的可能性と母親的要因の無意識的可能性とが相互に平衡的に働き合って魅力的な美しさを醸し出す。まして，島影の形も美しい瀬戸内海である。そこでゆったり過ごすことは父母に抱かれた幼児の心にも比較することが出来よう。

しかし，その理想的な風景は，理想的であるがゆえに，そこを訪れる旅人にとって別の不安すなわち安定しきってしまう不安を招く。言い換えれば風景に溶け込んで現状のまま大人になってしまうことへの不安である。従って，志賀直哉が父子対立を描こうとして訪れたとするならば，少なくとも風景の深層においてはやや美しすぎる風景なのかもしれない。事実彼は，先の第二・二の引用の後，すぐに次のように記す。「かう云ふ見馴ない景色を眺めて居ると，やがてこれにも見厭き，それがいい景色だけに却って苦になりさうだと云ふやうな気がした。」（全集第五巻161頁）この言葉の奥にはすでに目的の父子対立の小説が書き辛いという直観が含まれている。しかも「いい景色だけに」なのである。

ところで，考察をこのような普遍的深層だけにとどめるわけにはいかない。この普遍的深層の上に現実の尾道の歴史があり，当時の尾道の町がある。少なくともその現実と普遍とが出会ってこそ真に客観的な考察である。

そこでやや以降の考察を重ねて述べるならば，尾道の風景は決して単なる安定ばかりではなく，生き生きした生活を内包し，尾道の本質を形作る発展形態を示唆している。志賀直哉の先の記述に見える産業的側面はそのひとつである。歴史や当時の風景は，一方で上に示した普遍的意味を示唆するし，他方，より現実的な様々な尾道の姿を見せるであろう。そして，志賀直哉はその現実，換言すれば歴史的特殊性をもまた生きているのである。そこに，いま考察している問題の鍵がある。

まず，志賀直哉はなぜ尾道に来たのであろうか。そして，それは尾道の歴史とどのように関わるのであろうか。『暗夜行路』前編・第一・十二において，主人公が尾道に出発する場面では，尾道という場所は偶然友人に薦められて具体化している。それまで主人公は，「多分山陽道の何処か，海に面した処で，

簡単な自炊生活をする」（全集第五巻139-140頁）等々と考えていただけであった。そして，友人の薦めに対して汽車嫌いということで「何処でもいい処ならいいが，船のつく処だね」（全集第五巻140頁）と答えている。そして，初めに下船した尾道から主人公は山陽地方を少しは尋ねたりもするが結局は尾道を気に入り住むことになる。また，『稲村雑談』（昭和23年・24年）では，「実に偶然」（全集第八巻73頁，1974／1983）と述べられ，尾道に決めて行ったというより，尾道を基点に山陽地方を巡ったりした結果結局尾道に落ち着いたと述べている（全集第八巻74頁）。このように実際にもいわば偶然のように尾道に住み始めたようである。

とはいえ，当時の尾道と東京とを結ぶ社会的状況があったことも事実である。それを風景論として分析してみる。風景としてみれば，尾道を特徴づけるものは，港と寺社と坂道である。『暗夜行路』前編・第二・二－三において記述される風景もそれらの特徴を巡っている。しかし，その中で今日とやや異なるとするならば，坂に関する事柄であろう。志賀直哉旧居のある千光寺南斜面は，今日ではほぼ千光寺の真下を結ぶ標高にまで住宅地が迫っているが，当時はもちろんそこまでは家がない。志賀直哉の記述では，麦畑や隠居家，貸家が散在している様子である。また，谷岡武雄「傾斜地利用の歴史地理学的視点—地中海沿岸地域との比較において—」（「立命館文學」第391・392・393号，立命館大学人文学会，1978，9頁）によれば，大正3年（1914）時においては，その斜面の住宅地の上限は「善勝寺－艮神社－千光寺－天理教会－光明寺－持光寺を結ぶ線」とされ，やはり千光寺直下を除き，今日よりはやや低い。志賀直哉旧居は，その千光寺下の住宅地にあり，当時としては住宅地の最上部に位置していたといえる。このことは，筆者の尾道での聞き取りとも一致した。また，明治末期当時から昭和前期に至るまで，この地域には，海岸近くや長江通りの商家が，経済的にゆとりが出来，千光寺山や西国寺山の斜面に隠居家や貸家を建てるのが流行したとのことである。今日もその地域を歩けば，会社の寮や保養所などが目立つ。

ところでこの斜面の，住宅地と寺社とを風景として観察する時，一種の奇妙

な感じにおそわれる。それは，風景における聖地の問題である。山－平地－海という立体的な地形において，生活の中心が平地にあることはいうまでもない。そして，山と海はそれぞれに未知の場所として聖地であるとされる。当然それらに直面する為には儀式を必要とする。その場所がそれぞれの聖域の周縁部における信仰対象である。そして，一般にそれら聖域にはそれより内に生活を持ち込むことは出来ない。ところが，現在もそして大正初期にも，そのタブーが破られてしまっているのである。では，そのタブーがタブーとして守られていたのはいつまでであろうか。先の谷岡論文の付図（８頁）によれば，江戸時代後期は今日の古寺巡りコース，即ち，平地部から10メートル前後登った高さにほぼ等高線に平行に並ぶ多くの寺社を結ぶ線の下に住宅地が拡がっている。しかも，ここでもうひとつ注目すべきは江戸時代後期は，今日の尾道駅付近を含めてその直ぐ北斜面，すなわち，千光山西南斜面はまだ住宅地化していなかったという事実である。ところが，明治21年に市町村制が施行されたのに関して，尾道も周辺町村と合併の上，市制を施行したいとの意向で提出された「市制町村制施行之答申」によれば，すでに千光寺山西斜面において接する尾道町と栗原村とは「其実ハ軒ヲ連ネ壁ヲ合ス生計情態同一ニシテ，区別アルコトナシ」と記されているのである（青木茂編著『新修　尾道市史　第三巻』，尾道市役所，昭和48年，371頁）。従って，これらのことから考えれば，聖域への住宅地侵入は明治以降，近代における経済的発展と意識的変化によるものが大きいことが推理される。

まず，意識変化において考慮しなければならないのは，明治維新時の廃仏毀釈である。尾道では，西久保町の常称寺境内にあった祇園社が，久保二丁目に移転し八坂神社になったのと，長江一丁目の大山寺境内にあった天神坊が，隣の御袖天満宮になったというのが，風景としての象徴的な変化であった。そして，多くの仏教寺院が排仏毀釈の対象になったわけであるから，その管理も曖昧となり，背後の聖域への住宅地の侵入を容易にしたことが推測できる。

しかし，他方，人は単に気持ちだけで生きている訳ではない。やはり，その背後に，経済的な変化をも考慮しなければならない。少なくとも，尾道の経済

的発展が港に深く関わり，それがまた，明治時代以前の多くの寺社の建立に繋がったと言わなければならない。歴史的にはそれは次のように進行した。尾道の港としての歴史は古代伝説に遡る。昭和14年尾道市役所発行の『尾道市史 上巻』では発行の時代背景もあって神武天皇東征を尾道水道における最初の画期的事件として述べられてさえいる（10-11頁）。また，浄土寺の創建は「浄土寺文書」によれば聖徳太子の建立と伝えられ，少なくとも伝説上はこの尾道にかなりの経済力があったことが想像されるが，それは港としての機能によるものであることは明らかである。これらの伝説はあくまで伝説として捉えなければならないが，同時にそれが伝えられてきたのには，伝えられるだけのリアリティを考えなければならない。それは，瀬戸内海における尾道の位置と地形である。位置に関しては，古来重要な交通路としての瀬戸内海のほぼ中央に位置することに尽きるであろう。延長5年（927）に完成した「延喜式」巻二十三・民部下には，「山陽。南海。西海道等府國。新任官人赴任者。皆取海路。仍令縁海國依例給食。」（『新訂増補　国史大系　延喜式　中篇』，吉川弘文館刊行，昭和12年／平成2年，583頁）と，国司の赴任には主に海路を用いたことが記されているが，瀬戸内海はその中でも最も重要なルートであった。先に述べたような，水平線が見えないほどの島嶼に囲まれ，今日よりもはるかに深い入江を持ったその地形は，最良の港であった。その後尾道が港として急速に整備され商業都市として発展する契機は，嘉応元年（1169）に，後白川院領となった備後大田庄（世羅郡一帯）の貢米を京に回漕する倉敷地に尾道を指定したことにある（高野山文書，宝簡集一「後白川院院庁下文」）。その後，時代時代における政権の変化においても，尾道に対する権力者の庇護は，尾道の寺社への厚い信仰となって表現されることになる。筆者はこの経緯を尾道の寺社の成立年代とともに他で考察した（拙論「風景と象徴—広島県尾道の坂と映画『さびしんぼう』—」，地域文化研究所紀要　第6号，梅光女学院大学発行，1991，85-102頁）ので，紙数の限られた小論での重複は避けるが，少なくとも古代から平安，鎌倉，室町期の経済的発展を経て，江戸時代後期の安定的な風景を構成してきたことだけは確かなことである。例えば，「文化9年（1812）尾道図」

や「安永３年（1774）紙本著色尾道絵屏風」などの絵図によっても，千光寺山（136.9m），西国寺山（116.1m），浄土寺山（178.8m）を背景にし，それらを聖域として，今日の標高に寺社が平行に並び，その下に住宅地が開けて港を構成している様が描かれている。これは，先に述べた映像分析を伴う心理療法にとっても安定的な構図である。未知であり可能性の象徴でもある海に意識的に働き掛ける意味の港と市街が中心にあり，それら全体を統合的に支える神秘的原理を意味する寺社が高い所でより高い聖域と接する。すなわち，そこには古典的伝統的ともいうべきわが国古来の風景表現としての価値観が反映されている。

ところでこのような聖域に住宅地が進出した明治時代以降の近代は，まず単純に人口増加を考えることもできよう。『尾道市史　上巻』（昭和14年，尾道市役所）によって（160-164頁）人口推移をみると文化12年（1815）年には尾道と後地（明治４年廃藩置県時に尾道に編入）との人口は約13,000，明治５年（1872）には約17,500であったものが，大正９年（1920）には同じ区域が約26,500，しかも農村から尾道の住宅地として変質しかかっておりやがて合併することになる隣接の吉和，栗原両村の人口も合わせれば40,000をこえるものとなっている。また，大正７年の人口密度（一方里）は，広島51,988，呉112,725，福山82,710に対して，尾道は102,725である。大正時代初期の人口密集はすでにかなり進んでいたといえよう。

しかし，そのことはまた単なる量的変化に留まらず，質的変化をすなわち安定的風景に見られるような伝統的統合を破る価値観が侵入してきたことを意味する。大正元年（1912）に先立つ明治時代の尾道の経済的地位を示すものとして，明治12年（1879），尾道における国立第六十六銀行の創立がある。その都市の経済力に対応して第一から，第一五三までの国立銀行を設置したのであるが，同県内では，広島が一四六番であり，福山は第六十六銀行の支店が置かれたにすぎない。また，市制施行は明治31年（1898）である。『尾道市史　上巻』（尾道市役所，昭和14年）には，「尾道市制の施行は，日清戦争後国内経済界の堅実なる躍進と時を同じうした。尾道港はこの国内産業界の潮瀬に乗って，

過去の伝統の誇りのままに前進した。」(128頁) とされているが，日清，日露の両戦争後の戦勝景気に乗って尾道は20世紀初頭を繁栄のうちに過ぎていくことになる。また，港湾としてもこのころは広島県が県下唯一の経済港として充実させる方針を打ち出し，尾道の経済的発展に拍車をかけることとなる。明治17年 (1884) に設立された大阪商船会社は，早速，大阪－広島線，大阪－尾道線，尾道－広島線などの航路を新設した。もっとも，青木茂編著『新修　尾道市史　第四巻』(尾道市役所，昭和50年) によれば，大阪－尾道線，尾道－広島線は採算がとれずすぐに廃止されている (34-35頁)。西南の役後の混乱も収まり，すでに社会経済構造が広範囲の移動を求める方向へと変化しはじめたことを示唆しているともいえようが，中継港としての尾道の役割は未だ揺らぐものではなかった。その後すぐ尼崎汽船が同じ航路に就航，両者は第二次世界大戦の船舶不足で廃線となるまで激しい競争を続けるのである。先に述べた『暗夜行路』前編・第二・二からの引用に「大阪商船」とあるのは，まさにこの近代的な文明や経済活動の象徴としてある「大阪商船」なのである。また，経済活動の形態も西欧的近代形態へと移行する。いうまでもなく個人商店から，会社型経営への移行である。『尾道市史　中巻』(尾道市役所，昭和15年) 465頁以降の記述を参考に，会社設立の状況を辿ると，明治８年 (1875) 諸品會社，明治12年 (1879) 国立第六十六銀行，明治18年 (1885) 綿商社，明治19年 (1886) 藍會社，明治20年 (1887) 玉蘭会會社・食鹽商會・尾道開成合名會社・尾道驛運送營業組合，など明治初期から中期にかけて会社設立が相次ぎ，やがて明治27－８年 (1894－５) 頃になれば，株式會社尾道米穀取引所・株式會社尾道米鹽肥料取引所・住友銀行出張所・青物株式會社・尾道貯蓄銀行・尾道電燈株式会社，などのように経済活動が一層近代化したことを忍ばせる会社設立が相次ぐことになる。小論においてここで重要なのは意識変化の根底を形作る経済活動が，伝統的大家族的個人商店から，自我をむき出しにした契約を媒介に個々の労働者として会社に関わるという形態へと急速に変化していったという点である。この点では，志賀直哉の父も例外ではなかったことは既に述べた。

かくして，このような明治時代の変化の結果として大正元年（1912）は存在した。ここで見てきたことは，尾道も時代の近代化の流れと無関係ではなかったというばかりか，当時の尾道は，日本でも特筆すべき近代化の進んだ所であった。そして翻ればこの町に偶々訪れた感性豊かな若手作家としての志賀直哉にこのような状況は大きな影響を与えたと言わなければならない。

3．結　び

このように，風景を手掛かりにして，総合的現象としての，1912年の尾道を考察すれば，当時の志賀直哉の内面的状況と，その構造において極めて類比的であることが明らかになる。小説『和解』に見られる主人公とその父との対立は，経済や思想や宗教のすべてを総合して西欧的近代のもたらした，自我と自我の対立であった。このことは，例えば日記などを丹念に辿ってこの当時の志賀直哉の内面的軌跡を追った須藤松雄『志賀直哉—その自然の展開—』（明治書院，昭和60年）にも詳しい。また，その対立の根底には，「和解」が日本的伝統たる母性に包まれた大家族的意識によって支えられて遂行されていくように，志賀直哉自身の内面における近代的自我と普遍的位層をも含む日本的伝統との葛藤があった。これを同書では，対立的自然関連（自然と対立する人間の生き方＝筆者註）と，根源的自然との対立と捉え，尾道時代はそれが最も激しい時代であったとしている（110-111頁）。小論の側面からの考察からもそれをいうことが出来よう。さらに，この対立は「和解」へと移行するようにと，つまり少なくとも小説『和解』の完成時ころには根源的自然に集約されていくことは同書にも明らかな通りである。

さて，かくして，志賀直哉が尾道に逗留しながらも父子対立をテーマとした『時任謙作』を完成することができなかった理由のひとつを推測することが出来る。すなわち，尾道そのものが志賀直哉と同じような間主観的精神状況にあったということである。風景を手掛かりとした考察の側面からも，日本的伝統を具現した安定が，西欧的近代の持つ新しいエネルギーに侵食されていたことが指摘できる。従って，志賀直哉にとってみれば東京から離れたとはいえど

こか深い所では結局はどこにいても同じだという意識が働いたことが推測される。従って当面の不安定な感情は，尾道の伝統的な側面からは不安定さをぶつけて「対立」を作品に昇華するほどのエネルギーをも持てず，かといってこの町の他の側面としての近代化の中では一気に総合的な落着きを持つわけにもいかず，結局は何度も帰京したり，方々へ旅に出たりという落着きのない生活態度をとらざるを得なかったと言える。他方，その後の「和解」とそれに至る経緯を考えれば，少なくとも彼自身にとって尾道の港町的な受容的性格の側面にはそれなりの魅力を感じていたはずである。完全に見捨てるにしては母性的受容性の溢れる風景であり町でもあった。少なくとも彼自身の内面的必然性として，ここでしばらく過ごし，葛藤の中に身を置きつつも東京と距離を置き，エネルギーを蓄え，自己の成長を待つ必要があった。昭和30年9月18日，軽井沢で丹羽文雄,小林秀雄,川端康成と対談した際に,尾道の生活を回顧して,「東京を離れたことがあんまりないからね，いったらいったで，こんどは非常に淋しくって，東京に帰りたくってね。それだから，一年いたけれども，半分以上東京に帰ってたね，ちょいちょい，ちょいちょい・・・。それだけども，初めてああいう所へいったんだから，住んでる，という印象は強かったね，(後略)」(『臨時増刊　文藝　志賀直哉讀本』，昭和30年12月，河出書房，115-116頁)と述べているが，この幼児的な「さびしい」と大人としての「住んでる」という両極が当時の彼の心境を象徴している。また『稲村雑談』(昭和23年・24年)でも「淋しかった」と「相当長く住んだやうな気がした」とを並記してあるが(全集第八巻75頁)，同時に「自然にのびる麦が羨ましかった」(全集第八巻75頁)と，自らの成長の遅れを感じたりもしている。

また，本多秋五『志賀直哉』(岩波新書，1990)では綿密な草稿の考察を行って，尾道行きのきっかけはさほど強い父子対立ではなかったとの結論を得ているが，やはりこの点からもすでに直哉の成長が契機であったと言える。

ところで，やがて訪れる統合は，『城の崎にて』(大正6年・1917)に象徴されるような根源的自然，すなわち日本的伝統の側へと急傾したかのように言われることもあるが，しかし，それは単なる通過点であろう。これまでの考察の

経緯を延長すれば，大人の志賀直哉の統合は，伝統的なものを媒介にし，それに支えられはしても，新たな近代的自我を包み込んだ統合でなければならない。そして，それは多様な極を同時に持つだけに時には矛盾した態度を示したり，一見あぶなげな不安定さを見せたりしながらも，どこかでバランスをとっていくような姿をとる筈である。

極端な例として，「閑人妄語」（昭和25年・1950，「世界」10月号所収＝転載：『臨時増刊　文藝　志賀直哉讀本』，15頁以降）で一方では奈良の仏像が朽ちていくのであればそれでもよい，と伝統的文化財保護に逆行するようなことを述べ，その理由を現代人の負担増だとするかと思えば，他方では科学が地球からはみだしていると，近代主義批判をも述べるのである。とりわけ前者は文化人らしからぬ発言として当時も物議を醸したようであるが，現在の日本人の多くがあまりにも潔く伝統を捨て，経済的な効率の側に力点を置いた生き方をのみしていることを思えば，それは，彼なりの統合の一表現であろう。そして，それは現代の日本人の多くが意識的無意識的とに関わらず持っている一種不安定な統合でもあるのではないか。

さて，今日の尾道は，やはり風景としてみると美しい。江戸時代の人達から見ると不安定この上ないのかもしれないがやはり魅力的な町である。そして，近代の産物として生まれたかつての聖域に立ち並ぶ住宅を結ぶ迷路のような路地のその坂道こそが，今日の不思議な魅力を醸し出している。尾道を去ってやがてより高い成熟へと到達した志賀直哉についてここではこれ以上触れることは出来ないが，現在のこの尾道の風景もまた，彼のその後を暗示しているとは言えないだろうか。

主な資料：

1）『志賀直哉全集　第二巻』（岩波書店，1973／1983）
2）『志賀直哉全集　第五巻』（岩波書店，1973／1983）
3）『志賀直哉全集　第八巻』（岩波書店，1973／1983）
4）『和解』（新潮文庫・新潮社・昭和24年／平成元年）
5）『和解』（角川文庫・角川書店・昭和29年／平成２年）

6） E. Husserl “Die Krisis der Europäischen Wissenschaften und die transzendentale Phänomenologie” (Husserliana 6, Martinus Nijhoff, 1976)
7） E. H. Erikson “Identity and the Life Cycle” (Norton, 1959 / 1980)
8）『一冊の講座　志賀直哉　日本の近代文学 3 』（有精堂出版，昭和57年）
西垣勤「志賀直哉論　―その思想と感性をめぐって」・池内輝雄「志賀直哉・父子対立の問題」・山田有策「「和解」の構造」など所収
9）「立命館文學」第391・392・393号（立命館大学人文学会，1978）
谷岡武雄「傾斜地利用の歴史地理学的視点　―地中海沿岸地域との比較において―」所収
10）青木茂編著『新修　尾道市史　第三巻』（尾道市役所，昭和48年）
11）青木茂編著『新修　尾道市史　第四巻』（尾道市役所，昭和50年）
12）『尾道市史　上巻』（尾道市役所，昭和14年）
13）『尾道市史　中巻』（尾道市役所，昭和15年）
14）『新訂増補　国史大系　延喜式　中篇』（吉川弘文館，昭和12年／平成 2 年）
15）『高野山文書　宝簡集一』「後白川院院庁下文」
16）『地域文化研究所紀要　第 6 号』（梅光女学院大学，1991）
拙論「風景と象徴　―広島県尾道の坂と映画『さびしんぼう』―」所収
17）「文化 9 年（1812）尾道図」
18）「安永 3 年（1774）紙本著色尾道絵屏風」
19）須藤松雄『志賀直哉　―その自然の展開―』（明治書院，昭和60年）
20）『臨時増刊　文藝　志賀直哉讀本』（河出書房，昭和30年12月）
21）本多秋五『志賀直哉（上）（下）』（岩波新書，1990）

※なお，小論執筆に当たっては多くの尾道の方々にお世話になった。心から御礼を申し上げるとともに，一層の御発展をお祈りする。